HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	釧路公立大学
Citation	高等継続教育研究, 2, 56-75
Issue Date	2003-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51796
Type	other
File Information	Kushirokouritsu-2.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第 2 部

資　料　編

第１章　　インタビューの記録

1　釧 路 公 立 大 学

日　時　　2002 年 7 月 29 日　16：15～19：15
場　所　　釧路公立大学本部棟会議室
話し手　　荒又　重雄　氏（釧路公立大学長）
聞き手　　姉崎・光本・石山・上田敦・上田理・大嶋・金澤・川瀬・佐藤・白取・滝ヶ平・布上・平島・松浦

荒又　重雄　氏

大学設立の経緯

荒又　今日は、なるべく言える事は言ってしまいますが、大学の設立と運営のところで、「公立の選択の経緯と評価」とありますが、鰐淵市長さんが大学をもっと欲しかったんですね。釧路には教育大ができましたけれど、もっと欲しかったんです。それで、旭川医大ができるときに釧路に誘致したかった。しかし、失敗しました。私は、大きな経済政策として、北海道庁は旭川でなく、釧路に決めるように、動くべきだったと思います。なぜかと申しますと、北海道と言いましても、広うございます。

私、昨日まで東京で会議がありましたが、南山大学のドイツ人の学長が北海道の道の意味を聞くんですね。夜の懇談会でね。北海道というのはね。奈良・京都を中心にして、山陽道、山陰道、東海道、東山道、北陸道、南海道、南海道は四国ですね、西海道、これは九州です。そして、北海道ですって言いましたら、ああそうかと得心していました。そこへ行く前、1 週間も前でない、ついこの間のことです。札幌が 27 度くらい、東京が 35 度、最高気温がね。釧路は 17 度くらいか 14 度。私は、ストーブを炊きました。夜に。2 時間くらい。そういう世界ですここは。北海道と呼ぶのをやめようかと思うのですね。北海道というのは札幌あたりのことを言う。昔から蝦夷でも西蝦夷と東蝦夷と別な世界でした。釧路は北海道ではない。なんとか海道である。東北海道っていうのはダメですからね。東北がありますから、同じ意味だけど違った字を使ってなんとか海道って。家に帰って辞書を調べようと思うのですけれど、子・丑・寅・卯ってね。子・丑・寅・戌・亥とか。みな一字がありますね。その一字が良い字だったら、例えば巽っていう字がありますよね。東南だったら「巽海道」ですね。ここは丑寅だから「艮海道」です。それだけ違ったところです。

大きな高等教育の地域配置政策で考えたら、札幌とものすごく近い旭川でなくて、いまや第七師団がいるわけでないし、道東に置いた方がいいですね。それで、ここに病院が設置されているのです。日赤があります。道立病院、労災病院があります。市立病院もあります。病院も集積しています。とにかく、ここに医大を置けばよかったのですが、失敗したのです。政治力でね。

鰐淵さんの政治力というより、釧路の政治地位です。これは低いですから。知事の頭に支庁があるでしょ、石狩支庁、空知支庁。なんと言っても、釧路、根室はしりっぺたです。旧七帝大といっても、文部省の頭の中には序列があります。知事の頭にもそれ

があります。だから、失敗しました。そこで釧路市長は私立大学を誘致したいと思ったわけです。『沿革史』には書いてありませんが、早稲田と慶応に頼みに行ったんです。早稲田に行きましたら、所沢につくろうと思っているので、北海道に行く気はないと言われた。慶応に言ったら、いや、湘南につくるつもりなので、北海道へ行くつもりはないと言われた。

それで、帰ってきた鰐淵市長は何を思ったかというと、もうそれ以上やめてしまった。私学を誘致したいと思っても、何か金を出せと言われてしまうので、それでは、自分でつくって経営してしまえ、これが、鰐淵さんの政治判断だった。

それで公立を選択したが、簡単にはいかなかった。文部省はその頃、自治体が大学をもつなんて、身の程知らずだと、ここですよね。文部省が口に出して言ったかどうか分かりませんが、けど大方の人は、そういう表現をします。さらに、自治省も、人口 20 万人そこそこの市が大学など分不相応だという。

でも釧路では欲しいわけです。いろいろ悩んで、政治的知恵をつけてくれたのが、野中広務さん。鈴木宗男の先輩で、もう弁護しきれないと言っているあの野中広務さんが自治大臣だったのですが、知恵をつけてくれたのです。

山陰のほうに短大だけど、事務組合をつくって大学やっているところがある。それをいえば、なんとかなるかもしれない。四大を事務組合でつくる。釧路市だけで20万ちょっとそれだけで言っているのではない。釧路支庁全部の周辺 9 カ町村民もあわせてみんなで大学を欲しいと言っているんだ。だからよろしく頼むと言ったわけです。

そのときに、根室と一緒になればよかったのですが、なぜか根室と釧路は昔から歴史的に因縁がありまして仲が悪いのです。私は札幌から来ましたが、根室と釧路の違いなんかは、川が南に流れているか、東に流れている違いのようなもので、標茶の方から見れば同じですね。でもね、根室は蝦夷が千島を領土にしているときは、すごい勢いでした。いまは、追い立てられて小さいですが、昔は、「根釧」と言っていたのです。根室が先で、それがいつの間にか「釧根」になってしまった。だれが入れ替えたんだと今でも怒っているのです。そういう世界ですから、根室は一緒にならなかったんです。こらから一緒になればいいと思っているのですが、制度は一度セットされるとそうはいかないのです。

それで、釧路の 10 カ市町村が集まりました。10カ市町村が大学が欲しいと言っているんだからと押し切った。最初は釧路市立大学をつくろうと思った。市立ではないですから、公立だ。公立は一般名詞であって一つの大学につけてはいけないと文部省が言った。だが、他につけようがないのだから、公立とつけました。これは、結構、本学にとってはよかった。釧路大学であるよりも釧路公立大学の方が、全国の信頼を確保するのにはよかった。釧路はいろいろ有名になってきていますが、公立大学であるという信頼感が日本の場合は、まだありますから。

事務組合議会と説明責任

荒又　これは資料を差し上げてもいいのですが、ここはどのような財政になっているかといいますと、周辺の 9 カ町村が一緒に立ち上げた大学ですから、多少はコントリビューションしますよね。予算にね。でも、ほんとに微々たるものです。小さい町に限らず、去年今年ですとほとんど 10 万円に達しない自治体もあります。年間拠出が。私が赴任した当初でもいろいろ設計基準があって、これだけ足りないからみんなで、出し合うという基準がある。基準によって出してもらっている。私が赴任したとき、一番たくさん出していた厚岸町で確か 30 数万でした。一番少ないその年で鶴居村は 9 万円かそのくらいでした。

鰐淵市長さんはなんとか大学をつくりたい。釧路市だけだったらだめだから知恵がいる。しかし、周辺の町村に一緒になってくれと言っても、今の町村合併でも分かるように、この地域、釧路市だけ大きくてあと小さな町ですから、威張っている訳です。釧路がね。そんな釧路に頼まれてすぐうんと言うかというと、なかなかうんとは言わないわけです。そこで、音別のお年寄りの町長さんがなだめて、我々のためにもなることなのだからと。名誉にもなるからと。釧路市はひたすら、どうか後ろに並んでいてください、迷惑をかけませんから、と言う。

これは事務組合議会といいます。事務組合議会の管理者、理事長は自動的に釧路市長になって。なにか特別の基準で釧路市長以外の人が決まるということは一切ない設計でした。釧路市がどんどん人口が減って、抽象的には、阿寒町が市になって市長が管理者になっても良いわけですが、念頭にはありません。

運営は､年に 2 回か 3 回事務組合議会があります。釧路の市長が事務組合の管理者で事務組合議会に対して説明責任をもっている。大きい市立大学は、横

浜市立大学とかそういうところでは、小さいのでは下関市立大学があります。わりと古いです。そこでは市長も学長も市議会に対しては説明責任を負っています。ここの大学はそうではなくて、事務組合議会というのが、別にできているので。事務組合というのは、例えば、広域で消防を運営するとかにつくる組織です。大学のためだけの特別の事務組合をつくったわけです。

事務組合議会に出ている議員さんたちは、大体、市町村の議会から選ばれてきていて、それに説明します。学長はそこに参加しない。大きな私学でもなんでも私の知っている国際標準では、学長はもちろん出席しますね。ですが、そこで選ばれる学長なので、投票権はない。だが、説明責任を持っているのは学長です。ここの組織は説明責任を負っているのは、市長であって学長ではないのです。これくらいの入学生を得ました、これくらいの卒業をさせました、就職率はこうでした、などの説明を市長がするのです。

学長が関係がないのはおかしいのではないかという意見もいろいろあって、私が赴任して半年後、市長が交替して新市長が学長を出そうとした。建学のときから一緒に設計してきた事務サイドが強固に反対してきた。それで今どうなっているかと言いますと、休憩時間にちょっと顔を出すのです。学長に聞きたいことがあったら、どうぞと。ある議会の議員が「どれくらいの中期的な方針をもっているか聞かせてください」。そのとき、私はゴモゴモとごまかしました。それは、そういうことを言う、責任と権限はないんです。それは事務組合議会では市長に聞くべきことで、私に聞くべきことではないんです。

私が赴任したときは、学長室ではなかった。「管理者室」。事務組合管理者つまり市長の部屋、その隣応接室、その隣に学長室、その隣に学部長室があった。市長が新しくなって大学に対して最初に指図したことは、そんな部屋は使わないので、用途変更せよ。市民の中に、大学の奥の奥に、市長しか使えない立派な部屋があるというううわさがでたらしいのです。気持ち悪いからそんなところへは行かない。忙しいので、学校へもめったに行かない。大学の事は学長に任せた。だから、用途変更せよ、ということです。それで、しようがないのですよね。私が一番奥の部屋に移って、隣の私の部屋に学部長が入って、そのとなりをオープンの教員の懇談室にして、小会議も開けるようにしました。

地域の夢と建学理念の再解釈

荒又　私がそこへ人を案内するときに、壁をたたくんですよ。そうすると、ポコンポコンポコンと音がするんです。中は空洞で、立派に見えますが、実は大変質素なんです。入り口の門は大変立派でしょ。私がじーっと見て、「鰐淵さん、これはもしかしてサンピエトロかな？」と言うと、そうだと言うんですよ。市長さんはものすごく大学に思い入れがあって、サンピエトロ寺院のように円柱列を半円形にしたかったのです。ところが、予算が足りなくて、寸詰まりなんですよ。ですからちょっと曲がってるでしょ。あれは最初のイメージが残っているのです。夢の大きな市長さんだったから、大学ができたんです。もう、絶対にそうなんです。

この建物をつくるだけで、61 億円。敷地や建物。そのあと増設して 9 億かけて、60～70 億近くかかっているわけです。これはほとんど全部地方債で建てました。元利払がいまでも毎年 3 億数千万あります。これは、釧路市がだまって払ってくれています。支援は自治省だった。北海道庁は少しの支援はくれました。職員玄関に下に金属板が貼ってあります。“北海道市町村振興補助事業”と。6000 万円支援してくれました。

文部省がつくったのではなくて、自治体が地方債でお金を集めてつくったから、だから、ちょっと遊びも含めたおもしろい建物になっている。質素ですが、おもしろい建物になっている。これが文部省だったら、全国に同じような建物をつくりますよね。予算に対して、確保される平米数はどれだけでしょうと、言われるでしょ。

鰐淵さんが夢があって喧嘩しながらつくった。真中にアトリウムがあって、平面図で見ると小さい場所なんです。学生がガヤガヤ入ると、人がいっぱいになる。しかし、だれが設計したか、うまく設計されています。そこに 4 段階段があります。学生たちが走って突っ切ることはほとんどないです。回廊式になっているのです。その場だけ余裕空間になっていて心安らぐのです。それはね、誰が設計したかまだ、調べていませんが、賢いですね、ほんの 4 段あるだけで、突っ走らないんです。そういういろんなところに、地域社会の夢ですね。

鰐淵さんは有名人が好きで、地域から出た有名人で毛綱さんという人にいくつかの建物を設計させました。博物館とか。ここは毛綱さんではないんですが、イメージを借りてつくっています。

そこに鉄骨を組んだオブジェがありますが、イマージナリー・オーロラといいます。下田治さんと書いてあります。なぜあれがオーロラなのか、非常に解釈に悩みました。私は 2 代目の学長ですから、建学精神を学生に伝えなければならないのですが、悩みました。今、到達した解釈は、オーロラはギリシャ神話では、曙の神様なのです。ノーザンライツのオーロラではないのです。ギリシャの曙の神様なのです。

曙の神様はどんな神様かそれはまたいろいろですけれど、天手力男神（あまのたじからおのみこと）であるというのが私の解釈です。天手力男神はご存知ですか。天照大御神が天岩戸に隠れていたときに、天宇津女（あめのうづめ）がストリップダンスかなんかで、みんなでキャーキャーと楽しそうにしている。何を嘆き悲しんでいるのかなとちょっとみたら、楽しそうにしているのですね。そこをねらって岩戸を力いっぱい開いた神様が、そうなんです。天手力男神です。岩戸のように重い重い夜のとばりを下からこじ開ける天手力男神である。オーロラは下から夜のとばりをこじあける。そしてそこへ、アポロンが車に乗って天空を駆け巡る。そういうものに違いない。私の今の解釈です。

誰も教えてくれませんから、私が一生懸命解釈して、学生諸君に伝えなければいけない。私は二代目ですから、勝手に建学の精神を変えるわけにはいきません。

私の学校のエンブレムは青い桜形のマークです。小学校のバッジみたいで感心しないなと思っていました。私はヨーロッパ調の形をしたタテのエンブレムをつくりたいのですが、決まっていることなので、受けとめざるを得ません。これは、クシロハナシノブという花なんです。クシロハナシノブという青い花が釧路湿原に咲きます。やや華奢で、湿原の貴婦人と言われている。これは、釧路にとって大事な大事なものだという心が、最初から分かりますね。

そこに、私は新解釈つけて、クシロハナシノブというのは、釧路は寒い地域ですから、花が咲くチャンスはそんなにない、ちょっとしたチャンスに花を咲かせ、大急ぎで実を結ぶなかなかしぶとい花なんです。私が観察していますと、そういう強さをもった花なんです。そうやって付け加えた解釈なんです。いろいろ苦労します。

結局、言いたかったのは、鰐淵さんが一生懸命だったから、大学ができた。けれど、市長さんが強すぎたから、一生懸命だったから、プラスの面とマイナスの面とある。事務組合の学長の地位などもそうです。

市長が答えるよりも学長が答えることが簡単という、それが当然という時代になるでしょう。小さな大学ですので、学長の個性とパフォーマンスとで示して行きます。そうしないと、間に合いません。言葉で人を説得しようとしても、限界があります。ですから、態度で示します。言葉よりも態度で示して、あとで分かってもらえるようにしたい。そういう運営をしています。

北海道庁の高等教育政策

荒又　しかし、緊張はあります。北海道庁はその程度しかくれていません。北海道にある大学には、図書費 300 万を配っていた。その 300 万がこのごろ 100 万になった。貧乏になったから、北海道庁との関係は極めて薄いです。

はこだて未来大学ができたとき、北海道庁が 25 億円援助すると。そのときすぐに、私は、北海道の釧路支庁長、今の栗山の町長している川口支庁長にそれは、バランスが悪いのではないか、うちにも下さいと言いに行った。しかし、うちは経済学科、大学院もつくりたいので、支庁長は行ってくれたのです。地域政策課長と大杉さんと行ったが、体よくいなされた。学長はそんなことを言っているけれど、経営大学院などつくろうとしても先生は簡単には集まらないと言われ、ごまかされてしまった。私は自信ありましたよ。でも、できなかった。それから、稚内の北星学園大にも少し出しているはずです。北海道庁が、地域の高等教育政策を考えて中期・長期計画をもって、金を配っているとは思えない。函館に 25 億行ったのは、けしからんとは言いませんけど、で

も、ここへは来ません。自民党の伊東良孝さん、この人は、道議会で発言してくれました。しかし、何か、新しいことがあったら考えるがというくらいで、一銭も来ません。

私は、札幌で育ち、札幌の学校へ行きました。その当時、「釧路って、東京に週に1回か2回飛行機飛んでいるの？」と言っていましたが、一日に5便も6便も飛んでいます。私自身が東の外れの釧路を見下していました。私の反省もあります。

北海道庁は足下に巨大な北大があるものだから、頼り切っていて、独自の高等教育政策をもっていませんね。私はそう思います。会津は情報関係の立派なすごい大学をすごいお金をつかってつくったんです。はこだて未来大より 2 倍は力があるでしょう。最近は宮城・岩手・青森もつくっています。青森は釧路から学んで事務組合をつくって、開学したのです。ここの真似をしてつくったので、ここの人たちは俺達のほうが先輩だと思っていますが、青森ができたときに、もう青森に抜かれていたのです。

私がそもそもここに来たのは、青森公立大学の建学につきあったからです。青森の大学ができるときに、北大の経済学部長をしていて、いろんな相談に乗っていて、そして地域社会が大学をつくりたいといっているときに、どんなに強い願いをもっているかを、青森で見ました。釧路ができるときは、まだヒラの教授で、関係がなかったのです。非常勤講師で若干サポートしたくらいです。青森を見て、間接的に地域の大学に対する期待を感じて、それが縁で、自分にとっての出発点でここへ来ることになりました。

青森のときは、小学生のジュース缶募金からはじまって、結局20億の募金をあつめて、財団をつくったのです。釧路のときは、みんながつくってくれたのは、2億円。これは、大変なことなんです。大変なことなんですが、しかし、威張られても困るのです。青森はその数年後にさらに 2 億円集めています。どんどん流れが変わってきています。国際的にポリティクニークのカレッジ化。看護大学や福祉大学などできてきました。

そういうときの、各県の力の入れようはすごいです。岩手県立大学は西澤潤一先生命でやっているんです。西澤潤一先生という東北大学のノーベル賞級の先生を学長にあげて、西澤先生の言うことなら何でも聞きます、と。しかし、それを冷ややかに見ている人もいます。西澤先生がやっているうちはいいが、県は、毎年55億円も持ち出して、いつまで続くのか。岩手県立大学のために岩
手県はこけるのではないかなと言っている人がいる。しかし、あと先は分からない。それだけ高等教育に力をいれているわけです。

でも、北海道庁は、残念なことにそういうことはありません。北海道庁の高等教育に対する考えは間違っている。

皆さんどう思われるか分かりませんが、私は、堀北海道知事が学長で、中村北海道大学総長が副学長で道民カレッジだというのは、快く思っていません。何を馬鹿なことをやっているのでしょうか。教育委員会がやっている生涯教育プログラムがありますが、釧路の市民大学がすばらしいんです。私は釧路市民大学のあて職学長ですが、いろいろ私も助言し、釧路では、自学自習の地域社会でのモデルができました。ずっと立派です。道民カレッジというのは、各大学の公開講座みたいなもの、各地域でやっている教育プログラムのようなものです。それをたばねて連携して。連携して励ますのはいいです。しかし、どうやって励ますかというと、何回何科目講義を聴いたら道民カレッジ学士だ。何科目聞いたら修士だ。何科目聞いたら博士だ。高等教育の核心にあるアカデミックコアをなんと思っているのか。アカデミックグレードをなんだと思っているのか。

私は北大にいる頃は、何も面倒くさい事は考えないで、学問一筋の方だった。学部長になって、予算をもらい、北欧のいくつかの大学を見たのですが、初めての体験でした。大学管理者の頭でみたのがですね。カナダに行ってみても協定校がありますから。アカデミック・コアを中心に多種多様のエクステンションを広げ、日本でいえば、朝日カルチャーセンターみたいなものを全部大学にとり込む。はじめて訪れたフィンランドのタンペレ。そこに私の本も寄附して、タンペレ大学には、私のライブラリーがカタログだけですがあります。

そこへ行ってみたら、昼ごはん時には、タンペレ市内の半分くらいが大学でごはんを食べているのではと思うくらい、いろんな人が寄ってきている。同じじゃがいもの料理もいろいろあるのです。高級なところはバターと芋をまぜてミンチして、ぽろぽろと米のようにして食べやすくなっていたり、一番安いところは、ただゆでて皮をむいて食べるところもあれば、またスナック風のところもあります。いろんな人がいます。いろんな種類の学生がいます。

しかし、中心には学士のプログラム、修士のプログラム、博士のプログラムももちろん、ディフェンドのオープンの会もあります。そこを通った後の博士になる前の論文も図書館の前につるしてある。だれの批判でも受けるように、つるしてある。ちゃんとしたプロセスを経て博士として出て行けるような、しっかりとしたプログラムがある。多種多様なエクステンションをやっている。この姿を見て、北海道の道民カレッジのパンフレットをみていると、恥ずかしくてやっていられません。

高等教育は今多彩に展開していて、その昔のようにいわゆる少数の、人口の 4%くらい、私の頃で 8%くらいの割合で大学へ行くようになり、その他の人は、中卒で働き、高卒で働きだったが、今は半分が大学へ行くようになった。卒業した後もリカレントの教育や、生涯教育などいろいろなところで、高等教育、少なくとも、ハイヤーエデュケーションあるいはセカンダリースクールを終わったあとの多彩な教育を享受して、勉強をし続けるライフロングラーニングの時代、そういうときにどう設計するかということです。

私は、中村学長に苦情を言いたいです。なんで、堀知事が学長で、あなたが副学長なのですかと。あなたが学長で堀知事が顧問ならまだ、我慢するが、もう北大も落ちたもんだ、と思います。大学の側からすると、高等教育のグランドデザインをどう考えるかということがメタメタなのです。知事は、他の県と比べたら、北海道の高等教育はどうするかというそういう基本イメージはないですね。みなさんだって、道民カレッジで 10 科目とってそれで学士だったら。まじめに大学で単位をたくさんとって、やっと学士になるなんて、やってられないじゃないですか。日本はそこらへんが、ずぶずぶになってきている。大学だって、どこの大学を出たかが問題だという、そういう世界でしょ。

私、東京の二つの会議に出まして、新しく教えられたことがあります。以前、“ジャパン・アズ・ナンバーワン”ともてはやされた時代には、日本の OJT がものすごくもてはやされた。ところが、東京の行き帰りに三省堂新書の『進化経済学』を見たら、知の時代に関するカテゴリーが書いてあって、おもしろいことが書いてありました。暗黙知とか、要するに OJT で教えられるのは、従業員の経験なのですね。ところが、会社が経験してきた従業員の経験知を制度で守って、後輩に受けつぐのでは、今の時代、会社は潰れる。もっと違った知恵で絶えずハンドルを切らなければならない。

IBM は、ついこの間までハードで売っていた。IBM のタイプライターからはじまって、コンピューター、今は売上のほとんどが、ソフトに変わっている。ハードの勝負でなくなっている。そういうハンドルを切るときは、企業の中に蓄積された経験知ではやっていかれない。だから外からの知恵がいる。よく即戦力と言いますが、即戦力というのは要するに会社がケチくさくなって、ゆっくり企業内教育などやってられない貧乏だから、外で勉強してそして使えなくなったら捨てるからということだと。それは、半分は当っていることだと思うのですけれど、それだけではないことが分かったのです。会社に蓄積された経験だけではない知恵でハンドルを切っていかなければやっていけない。

そうしたら、大学にはチャンスがありますね。大学は広い学問と広い知恵でもって、会社の中の経験は少ないが、その知恵を外から批判して何かをつけくわえることができる。

釧路でもそうなんです。商工会議所の副会頭が言ったのですが、じっと井の中の蛙のように、周りの温度が上がってきているのに気づかずにいると、気がついたときには煮えて死んでしまう。釧路はそんなところだ。だから、外からの知恵で刺激してもらってハッと気がついてハンドルを切りなおす必要がある。

本当にそういうことはあると思います。私が赴任したときも、外から見れば、三大産業にぶら下がっただけではもうやっていけないことは、もう見え見えなわけです。釧路にも夕張と同じように、産炭地振興の基金ができたのです。出発点は、最初は質素な 50 億。それにプラスアルファで今、100 億になっている。この基金ができた時点で、これは、炭鉱がなくなることの慰謝料みたいなものなんですから、それができたときにはもう、太平洋炭砿の運命はここで決まったと、私にそう見えるのに、ずっとここでやってきた人は、まさか最後の一つの太平洋炭砿を政府が捨てるわけがないだろうと思うわけです。これなんかそうですね。

外から見たら何でも正しいわけではないです。しかし、中にだけいたら決して分からない。外の刺激で分かることがあるのですね。大学は、その外の知恵、必要な外の知恵を探し出して持ち込む。そういうノウハウを企業の外で用意することができる。そ

うすると、日本の大学に、若干のメリットをつくり出すことができるなと、2〜3 日前に思いました。

学生の出身と地域交流

荒又　次に学生の出身定着率ですが、これはデータを見てご存知の通り、ここの大学は地元の釧路管内からは、2 割しか来ていません。もちろん推薦入学の枠もつくっています。就職するのも 2 割弱です。あとは、全部外からです。この外からが、開学当初は札幌圏から溢れ出てきていたが、このごろはあふれ出てこなくなりました。その分を全国から来て、埋めてくれています。これで、なんとかしのいでいます。全国から来てくれなくなったらこの大学は終わりです。

私は、この先生方や職員に言っているんです。酒田短期大学みたいなことになったら大変です。坂から転げ落ちてそうなるしかないようなときには、そこに行く前に自らバンザイをして廃校するのが正しい。自分の食い扶持のために大義を忘れたらいけない、と言っているんです。

私は生きていかなければならないということは、あると思いますけれど。しかし、そのときは、大学のアカデミック・コアとは、別だ。開学のときは、大学をつくるつもりだったけれど、大学ではやっていけない。これは、アメリカのコミュニティーカレッジと同じだ。アメリカ的なコミュニティーカレッジでやるならばいいですよ。学位なんていう世界と違うから。誰でも入れて、朝日カルチャーセンターみたいなことをやって、あるいは、各種学校なんかやっている講習会をやって、それを束ねている。教育を提供しますから、それはそれでいいのです。

だけれども、アメリカのコミュニティーカレッジは、研究などとは関係がない。カレッジと言っていますが、大学ではないのです。この大学が付き合っているキャピラノカレッジというのがあるのですが、提携校が今は三つあります。韓国の牧園大学と組みましたから三つあるのですが、最初の二つは、市長のイニシアチブでできたのです。志の大きい鰐淵さんのことを半分冷やかしながら、学生の前で歴史的事実として褒めるのです。

釧路市は港の町です、カナダのグレートバンクーバーの奥の方にバーナビーという港町があります。そのバーナビーと姉妹都市なのです。グレートバンクーバーは、もともと出発点のバンクーバーは横浜と組むようなところですが、奥の方にもっと小さな港町バーナビーも含むのです。そこにサイモンフレーザーユニバーシティーという、戦後できた大学だけれども、堂々たる博士課程のある大学があります。バンクーバーには、ユニバーシティー・オブ・ブリティッシュコロンビアという、昔からの大学があり、新渡戸稲造先生が寄附した日本庭園などがあります。

この大学ができて、まだ 2〜3 年しか経っていないまだ卒業生もいないのに、サイモンフレーザー大学に行って、釧路とバーナビーは協定町だから、釧路公立大学とサイモンフレーザー大学は協定校になりたいと言ったのです。随の煬帝のところへ使者を送って、日出処天子、日没処天子に書をいたす、つつがなきやといった（笑）。そうしたら、サイモンフレーザーの方も姉妹都市としてあまり冷たいことも言えないから、分かったと。でもしばらくの間は、私のところへ卒業生を送ってくれているキャピラノカレッジというのがあるから、そこと一緒になって三者の関係にしましょう、と言ってくれたのです。これが、ありがたかった。

キャピラノカレッジというのは、コミュニティーカレッジから出発しながら一群頭を抜いたいい大学です。学生を大事にしています。行ってみまして驚いたのは、自分の所から卒業生を出すことを第一の目標にしていない。うちにいてもバチェラーを出してあげるよ。たけど、途中から力をつけてユニバーシティー・オブ・ブリティッシュコロンビアやサイモンフレーザー大学へ進学しなさい。どんどんと押し出してやるから。

そういう大学へ行くためには、そこで出しているカリキュラムがどれでもというわけにいきません。向こうの大学でもカウントしてもらえる科目はこれとこれとこれ──ユニバーシティー・トランスファーラブル・クレジット。ここでゆっくり卒業するならこれもこれもいろいろな単位がある。ブリティッシュコロンビア州のちゃんとした大学で、共通して認めてもらえる、持っていける単位はこれですよとユニバーシティー・トランスファーラブル・クレジットをきちんと仕分けして、学生を指導します。

いよいよ、コミュニティーカレッジにならなければならない、卒業させなければならないという時代でも釧路公立大学もそういう知恵を入れれば、ちゃんとしたものをちゃんとしていけば、生きていけるかもしれない。

それと同じことを、日本の大学では工学の人たちが考えはじめている。JABEE という新しいプログラ

ムが動きはじめているのです。JABEE とは Japan Accreditation Board of Engineering Education です。

日本の工学部卒は、世界的な評価を得るために、教育のプログラムのチェック項目がいろいろとありまして、それをクリアした学科、あるいはコースの卒業生には、JABEE の認定のコースの卒業生だと、日本工学院大学という学長の大橋さんがそれをやっておられて、説明してくれました。学生が 3 年生になるときに、どっちのコースに入りますかと選ばせます。がんばってこっちに行きますと言ったら、じゃあやりなさい。厳しいコースでね、卒業したら JABEE 認定。そうでなくてもいいよと言ったら、普通の卒業生になる。これは、キャピラノカレッジのプログラムに似ていますね。そんなのがつぎつぎに起こってきている。

一口に大学といっても、ここまで広がってしまったら、いろいろあるアカデミック・コアをどこまでいくか。必死になって考えているのです。どこでも、それでも日本は、日本の中の JABEE もあるけれど、そこらへんが曖昧模糊として、これが本当にいけない。

話がずれてしまいましたが、とにかく 2 割しか残らない、最初はいろんなことがあったと思います。最初、推薦入学の枠をつくったら、入ってくるけどなかなか卒業をちゃんとできない。そしてあるところまでバランスしたときに私が赴任した。

赴任して事務組合議会に挨拶をしたとき、二つか三つ言いました。「この大学は、釧路だけの大学とは思っていません。北は天北峠、中央では狩勝峠、それから日勝峠。それを越えた道東・道北は、全部釧路公立大学の縄張りであります。釧路の人たちだけを言うのではありませんよ。しかも、釧路の方々が一番良くできる子は東京に出す、二番目は札幌へ出す、三番目はどうも心細いからどうかあなたのところで預かってくれないだろうか、というのはだめです。この大学は、全国から優秀な子を連れてきますから、だから息子の嫁にしようとか、商売を継がせようとか思ってください。そういう意志がなければ大学になりません」。事務組合議会で、新米の学長がそう言い放ったのです。

いろんな批判をしている人は、いると思います。いると思いますが、私のバックには、この大学がここにあるのは、ここの地域の子弟に勉学のチャンスを与えるということは、一つの要素である。一つの要素である事は、要素であることにすぎない。もっ

と大きいことは、ここに人材と知恵の交流拠点をつくることです。たくさんの優秀な人が流れ込んで流れて出てゆく交流の拠点をつくっていく、という戦略があります。

幸いにして、釧路は日本の異郷ですから。いろんなところから、けっこう元気な女子学生もいるんです。なぜ、あなたそんな遠い所へ行くの？と言われながら、四年間は北海道で暮してみたい。北海道なら、いまや小樽や札幌ではないですから、釧路へ来てくれる元気な人がいるのです。そういう人たちをチャームして、そういう人たちに来てもらう。釧路を好きになってもらって、釧路に勤めてもらったり、そういう人たちとつきあっていると、こちらの人たちのここから出られない質素な家庭の人たちも元気が出てくる。

この大学を、拠点にして韓国に留学するとか、キャピラノのカナダ人学生とつきあうとかチャンスが出てきます。今年の春、卒業式の優等生免状を 5 人の人に渡しましたとき、優等賞を渡しました 1 人が弟子屈の女子でした。韓国に送る留学生として決まった人は厚岸の男子でした。そういう人たちが、ここへ入ってきて芽を出していく。また、遠くの方から 4 年間は変わったところで暮そうと。ここが釧路の売りだと思っています。

この学長メッセージに書いてある、「釧路は日本の異郷であります」と。「都会に疲れた人はここへ来なさい。ぐるっと見渡しても、なぜ俺をガンつけすると言われることもありません。周りに人目はありません。熊と鶴と狐しかいません」。こういうところにいると、人の懐かしさもよく分かる。そこで、「醜いアヒルの子も白鳥になって飛び立ちなさい」と書いたら、職員からクレームがつきました。うちの子どもは醜くありません。これは、昔のグリムかアンデ

ルセンの例の話なのですが、そのようなことをごちゃごちゃ言っても始まらないので、「醜い」だけカットして、アヒルの子かと思ったら白鳥になったと。それだけは残しました。

釧路はそういう点では一種の矛盾があるのです。そう思っています。

村上春樹という若者に人気のある作家がおりますが、この人は不思議と英訳もたくさんされています。最近、『神の子どもたちは皆踊る』という、短編のオムニバスの作品集が出たのをご存知でしょうか。英訳したときは、アフター・ザ・クウェイク。この第一章は釧路なんですよ。

けっこう真面目な男なのですが、ごく普通であまりに日本的なただのサラリーマンが奥さんもいて、奥さんが何か分からないけれど、なんかこれでいいのかと思っていたところあるとき、地震があって、飯をつくるのも忘れて地震の映像をジーッと見つめた。そのあげくに亭主に書置きをしていなくなった。

その書置きには「あんたは空っぽだ」と。どうしたらいいか分からなくなった男が、友達に示唆されて、立ち直りのきっかけにやって来るのが釧路なんです。

釧路は何がなんだか分からない街で、釧路空港に降りるとその友達の妹とその妹の友達とそのまた友達が待っていてくれて、街まで連れて行ってくれるのです。どうしてそんなことになったのか。いや、こんなことだったんだ。ああ、分かった。私の知り合いの奥さんの一人で、釧路に UFO が下りたのを見て、なんだかおかしくなっていなくなった人がいる。それと同じだね。私はそれで、釧路の人は一瞬にして事の本質を理解する知性を持っているのだと思いました。

そして私は、村上春樹に「勝手に感謝する釧路地元の会の会長」と名前を書いて、この会長は、次は私だと言う人にすぐに譲る会長だと。会の名前は『かきくけこの会』と通称します。勝手気ままに釧路のけっこうを送る会の会長だと、村上春樹に釧路の地ビール 1 ダースを贈りました。そのビールは出すと地元の地ビールの社長が言いましたので、私は手紙を書いただけでよかったのです。そうしましたら、村上春樹の秘書かなにか誰か分かりませんが、はがきが一枚帰ってきました。手紙も入れて、私の名刺も入れて送りましたら、村上春樹もとても喜んでおりました。感謝のはがきが来ました。

私はそうやってふざけながら暮しておりますが、私なりの哲学があります。学生たちには、日本の異郷の釧路を体験していただきたい。さらにはその異郷がとんでもないところにつながっているのだということを分かってもらうために、カムチャツカとかアラスカとか、北方圏のとりわけ北の方に縁をつないで道をつけようと思って、私は、結構自費で勝手に飛び回っているのです。この間マクミランから出た北方圏の大学の紹介の本の中にも日本に関する 1 章がありまして、私が書いたのです。そういう努力はしているのですが「なかなか面白いことをやっているね、俺も組む」と言う人が現れないのです。

私が北大で学部長をしていたときに、今の反省点として、いろいろ言ってみてみなさんなんかしらっとしていると、なんだだめかと思いやめてしまったのです。ところが、IBM の社長がそうではないのです。これまた反省しました、昨日。IBM の社長はメールで全社員に社長のいろいろな意見を言ったり、ホームページをつくったり、そのときに四の五の言ってはいけない、社長が言うのは、三項目に限る、その三項目を繰り返し、繰り返し伝えるのだと言うのです。私は、繰り返し繰り返し伝えることをしてこなかったので、展望が見えてこなかった。

そういう意味で、学生の誘導の政策はまあまあ成功しているとは思っているのですが、これからどういう時代になるか分かりません。今年の春の入試は、入学定員の 10 倍の人が受験しました。謎です。私はパンフレットは一生懸命つくっています。私が先頭に立って、広告会社にガミガミ言ってつくっています。すると、食堂で学生に会うと、「学長が釧路にいらっしゃいと書いていたので私来たんです」という学生も少しはいるのです。

それだけではないですね。なぜ、そのようなことになったかと申しますと、一つは、情報化が幸いしたのです。300 人しか入学定員はないので、10 倍しても 3000 人しかない。このパンフレットは効率よく配られたんです。一手に扱って仲介する業者が現れたのです。我々が配ろうとしたら、金がかかってたくさん配れないです。みんなに拾われて捨てられたらしょうがない。ところがそういうセンターができたら、ある程度関心のある人に渡る。関心のない人にはいかない。

予備校の駿台のコンピューターで「ばんざいコーナー」というのがある。これをクリックすると、「入れそうなのは釧路公立大学」と出る。ここは偏差値がそれほど高くないのですから。それで、どんどん

来てくれたのです。しかし、辞退数も高いです。私が皆さんに言うのは、今いい波が来た。いい波に乗って 50 メートルでも 100 メートルでも沖に行く。うっかりしていると、波が去ったときに座礁する。だからいい波が来たときに 50 メートルでも 100 メートルでも先に行くんだと言っています。だから必死の経営です。

この大学の学生達はいわゆる偏差値がすごく高くてかしこい学生が集まってくるのではないのですが、わりと質素な学生が来ます。公立大学ですから授業料が安いですから、わりと質素な学生がやってきます。質素な学生だからといって油断していていると、去年事故が起きたのです。日勝峠で学生が 1 人亡くなったのです。質素な学生がなにかの拍子に左ハンドルの外車などに乗ってしまったら、精神が変わるのですね。隣に 1 年生の女子学生を乗せて、左ハンドルで日勝峠で車をぶつけてしまった。私は今でも忘れられません。

しかし概して言えば、そういう学生は少ないです。地域社会では公立大学の学生はわりと大事にされています。大事にされているというか、少なくともしょうがない学生ばかりだというのではなくて、むしろけっこう真面目でいい学生だと言ってもらっています。

これは、ありがたいことです。あとはどうやって、必死に就職してもらうかです。地域でも上手にアルバイトに使って、そして就職させている企業はあるのです。TSUTAYA という本を扱っているリライアブルという店はちゃんとやってくれています。相当長期にアルバイトをして、そこに就職したり。

ところが、私はインターシップをやりたいのですが、私がやりたいインターシップは、学長の労働者供給業です。大学は斡旋はするが、労働者派遣業はできないでしょう。

学長にその権限をもらったら、ちゃんとした経営者の所へいったら、単位をつけてやる。いても勉強にならないしょうがない経営者のところへは、派遣しない。単位をもらってもいい経営者のところでアルバイトしたら、レポートを書かせて、最初に要綱を渡しておいて、観察すべきこと書き込んでおいて、自分の目でもそれを見て、各先生がチェックをして、よし、これで 1 単位。

大学の諸活動を支える体制

荒又　私の考えることは、大体制度の許容範囲の外にあるのです。規制緩和してくれないと、私の考えていることが実現しないのです。道経連とか文部省がやっている、やたらの難しい行政手続のかかるようなことは、この大学は人手が足りなくて、そんな面倒なことはやっていられません。はっきり申し上げます。専任事務職員は 20 人しかいないのです。専任の教員が 40 名います。このごろ腹が立ちます。調査物が多いのです。事務職員はそのようなものを書かされて、時間がなくて学生や教員のサービスがなくなったらしょうがないです。

掃除はよくやってくれている。最初から外注ですが。近所のサラリーマンの奥さんグループが会社に雇われてチームを組んでいます。チームの中の誰かが辞めると、チームの人がリクルートする。だから、実によくまとまっていて、実によく暇無くまめまめしく働いてくれています。

この春、掃除会社が変わったのです。札入れで別の掃除会社が落としてしまった。私はびっくりしまして、公園のトイレを掃除するのと違うんだ。大学で掃除してくれている人は職員と同じくらい大事なのだ。あの人たちに掃除してもらっているからいいのであって、他の掃除会社がまた別のチームをつくってきても困るとわめいたら、掃除会社が会社は変わったけれど、掃除する人はそのまま継続してくれたのです。私のやる事は大体きわどいことばかりです。

エクステンションプログラムと社会人大学院

荒又　エクステンションプログラムは少しやっていますが、いわゆる公開講座というのは開学からやっています。

大学の立地としてよかったと思っていることは、北海道大学だと駅裏に大原簿記学校だとかダブルスクールのチャンスがありますね。ここにはないので、ダブルスクールを誘致するのです。学生課が就職指導という概念の中でやります。いろいろな講座を夕方誘致します。学生たちはお金を払わなければならないですが。大学の直接の経営ではありませんが、学内で学生のために開かれる、まして場所をタダで貸せば講座料は多少安くしてもらえます。現役の学生たちにとってのエクステンションプログラムは、そういう格好でやっています。これは、この地域の特性に合わせたプログラムです。

他のところにサービスしようとしても、科目履修制度もありますが、なかなか大変です。私は、経営

大学院をつくりたい。経営大学院をつくるときは、社会人相手です。一貫して言っているのは社会人大学院です。ここの学生が持ち上がりで入る大学院ではありません。

ここの大学の学生が大学院に行きたければ、どんどん外の大学で新しいチャレンジをして経験をしてもらう。社会人の大学院の人を集めるには、地の利はあるのです。広い駐車場もありますし、午後 3 時以降 8 時くらいまで、夕方車で乗りつけて、プログラムに参加して帰るのならできないことはないのです。文部省の規制を緩めてくれれば、釧路に 3 カ月来てくれればいいからと。その間に 2 単位 4 単位をびちっとしてくれ、ただし給料は 3 分の 1 だよ。そういう先生達を全国あるいは、外国から集めてくるくらいの器量なら私にはある。しかし、プラス運営費 1 億 5 千万くらいくれないとやれない。それくらいのお金もないのです。この地域には。

ふつうは今いる先生たちを組合わせて大学院をつくります。わたしは、グリコのおまけのような大学院はつくりませんと言いました。つくるとすれば、役に立つものをつくる。卒業生はどんどんいろんな大学へ入っています。東大の大学院に入るのは学部に入るよりずっと易しい世界です。行けるからがんばって行きなさい。

地域には非常に真面目な中堅の自治体の職員やビジネスの職員がいます。トップはいくら小さい会社でもけっこう遊びながら耳学問をしています。その下の人たちが動けない。動けない人たちに外から知恵を運ぶのが大学院として大事なんですけど、ところがこれができないのです。

そこで私が次善の策としてしきりと話しかけたのは、小樽商科大学がサテライト教室を開いてくれることです。私は北大とは手を組みませんから。北大の経済学部はドクターコースで国際的なアカデミズムでチャレンジする勉強してくれればいいのです。釧路の地域社会にサービスはしてくれなくてもいいです。小樽が札幌にサテライト教室を開いている。それを釧路公立大学も会場にサテライト教室を開いてください。小樽から来てくれなくていいから、ここの 2 人くらいの先生を非常勤講師に雇ってもらって若干の手当てをみて、日頃はね。ときどき来てもらうのでいいですから、そうしたらあなたたちにも、メリットはあるでしょう。国公立大学集中統合の時代に。すごくいい話ではないですかともちかけるのですが、なかなかうまくいかないのです。

あそこも経営大学院だけでなく、いろんな学科の先生がいろんなことを考えますから、だから、そう簡単にはいかないのです。それで今のところは一歩も進んでいません。一歩もすすんでいない中でも、社会人の枠はやりました。社会人の枠は経営学科を増設したときに文部省が言ってきたんです。その当時は、文部省は入学定員の規制を強くやっていました。経営学科を増設しても、地域の人は学校が倍くらいになったように思うのですけれど、実態は 250 人の定員が 300 になっただけなのです。しかも 300 の中の増えた 50 の中は、いっぱい社会人入学枠や外国人枠や帰国子女を書き込みました。だけれど、釧路に帰国子女が来るわけがないのです。

社会人入学は若干希望が出ます。社会人入学では、今年卒業した人、去年卒業した人も優等生が出ました。ここを終えた後、社長さんなどが帯広畜産大学の大学院に行ったり。ここのお母さんが教育大に行ったり、いろいろあります。

でも一定数以上にはならないです。いくら学生もアルバイトをやっているとはいっても、日給のいいところを、全部で週 40 時間くらいは勉強する学生の時間割に合わせては、社会人はなかなか暮せないです。ですからできていない。大学院もできていない。そうした中で、大学院ができたら参加するであろうと思われる人たちが、地域経済研究センターの単位にならない勉強会に参加して、2 年越しの報告書を書いています。

地域経済研究センター

荒又　地域経済研究センターについては、いろいろな政治的経緯については抜きにして、わたしがセットした最終的な政策思想だけを言います。いろんな自治体が何かやろうとすると、結構シンクタンクにお金を落としています。私のみるところ、シンクタンクは、金をもっている中央官庁と金をおろしてほしい自治体の間にはさまってつじつまのあう文章をつくるのが役目で、学問的な良心というのに関係ない世界です。

例えば、釧路が何か書いてもらったとしたら、書いてあることはすべて釧路が知っていることです。彼らは聞き取りをしてそれをまとめるのですから。まとめるときに、中央官庁の動き方とか、いろんな条例とか民間のマニュアル、そういうことはよく知っています。金を落としてもらう上手な言い訳のチャンネルをつくってもらって、実際にやってみてう

まく行かないときに責任をとったシンクタンクはないのです。大学をつくるときにいいシンクタンクもあります。ある大学で見たのです。報告書をつくるまではいいですが、つくった後の運営のことまでシンクタンクが責任をもったことはない。

私が北欧で見てきたシンクタンクは、ヨーロッパのシンクタンクというかコンサルティング会社は、違いますね。私は、レニングラード、今サンクトペテルブルクといいますが、そこでフィリップモリスのたばこの工場建設現場を見ました。イギリスのコンサルタントの会社がいろいろ検討して、この部分はどこの国のどこの会社に発注せよと言うのです。土台の基礎工事はロシア、建屋をつくるのは、フィンランドだ。配管・配線はドイツだ。現場と始終やりとりして、見積の部分修正などいりますときは、全責任をもってやっている。

それに比べるとムネオハウスというのはなんてことですか。釧路で見ていますと、私なんかこの頃宗男支持になっています。かわいそうにと思って。判官贔屓だと言って。宗男ハウスが地元の業者に金を落とすのが、何が悪いのかと思っている。悪いのはすべて丸投げで三井建設などへ行ってしまうこと。ムネオハウスは写真で見たところ、そんなに大きな会社に頼まなくてもできますね。基礎工事をしっかりすれば。地震の多い寒いところの工事は、お手のものですから。やれば後はプレハブじゃないですか。なぜ、そんな巨大会社が出てこなければいけないのか。そちらの方が問題だ。だから、宗男さんががんばれば、がんばるほど、そういうことがボロボロ出てきます。東京地検も必死ですから。

地域経済研究センターの設計思想は、釧路市とか小さな地域でもいろいろなシンクタンクなどにお金を落としているのを大学に持ってきて、そして市の職員や地域の人たちが大学にやってきて、行政から離れた大学の中で、真面目な学問的な良心にもとづいて、何か調べてと報告書を出せば、一番知恵も固まるし、金もかからないし、正しいものができるという設計なんです。

そして、最近少しずつ動いてきました。地域は、大学があるのだから、文部省からお金が出ているのだろうと思うのです。とんでもない、釧路公立大学には文部省からほとんど一銭も出ていません。科研費の他は。でもだんだん分かってきて、共同研究が動き始めています。共同研究の他にも地域のセンターが世話して、そこに、地域で大学院のマスタープログラムなんかがあればそこへ来て勉強するだろうと思われる人が集まって、勉強会をやっています。

なぜ、そんなものをつくったのかといいますと、ケガの功名でもあるのですが。国立大学でしたら、今設計しているようなものは、許されないのです。文部省の頭の中には、確固とした序列がありますから。まずバチュラーのプログラム、次にマスターのプログラム、つぎにドクターのプログラム。そして、力がついたときに、産学協同のリエゾンオフィスをつくる。これが順序です。ここは、マスターをつくる金も無い。だからセンターをつくったのです。センターは小さい教授 1 人の部局ですけれど学部と並行しているんです。センターの教員は学部の教員の中に含まれていないのです。入学試験とかなんとか、心配しなくてもいいので、思いっきり地域との結びつきでやってくださいというセットにしたのです。

そして、いきなり教授をはっています。リエゾンオフィスですと、だいたい教授を手助けするせいぜい助教授をはるのです。私のところではそれができないから、怪我の功名で、いきなりたった 1 人だけど、教授をはったのです。これは十人力の役割を果たしています。地方からあちこちから見にきています。文部省が面倒見てくれないおかげでやっているんです。

大体こういう教育機関は学部の中に研究センターをつくるのが多いのです。そういうものは、本学開設時の設計の中にありました。地域分析研究委員会というのが、そこに若干予算をふって、やってきました。いまもやっています。地域研究に関するテーマであれば、研究費を若干プラスアルファで支援したり、研究成果を『地域研究』という雑誌、第三の紀要に発表して配る。そういうのはいままでも続けてきました。これとちょっと違った動きも私の代になって、ほぼ成功したと思っています。

教育へのフィードバックはやがて少しずつ出てくるでしょう。今のところはセンターの研究活動に学部の教員が少しずつパラパラと参加するという格好なのです。

単位互換

荒又　単位互換は釧路公立大学もやりました。ただこの単位互換については、北大経済学部が小樽商科大学と国立大学同士で単位互換をやった。その設計したときの私は当時助教授でしたが、教務委員でした。小樽に行ったり、小樽から迎えたりして、プログラ

ムをセットしたのは私です。日本で一番早くやりました。けれど、小樽と札幌の距離の壁は大きかった。そこに講義を聴きに行こうと思ったら、丸一日がつぶれるのです。今年は、この科目この科目とずっとやりましたが、ほとんど死んだようなものです。

釧路と教育大学の方から申し入れがあったときに、ああいいですよと、その時のことを考えていますからと、そのときよりはましなプログラムになるから、すぐにやりましょうということで、一年たって、協定書に調印しました。これは動いています。動いていますが、近いといっても自転車で走っていける距離ではありませんから。なかなかそうたくさんの人数になりません。単位互換というのはそういう意味で大変です。

学生の諸活動

荒又　やっぱり、学生たちが一つのキャンパスに集まってきて、ある学生はいつも食堂のこのへんにいるとか、ある学生は喫煙所のこのへんにいるとか、また、図書室の閲覧室にいるとか、それぞれ居場所をみつけて、なるたけたくさんの学生がこのキャンパスに集まっている状態をつくりだす運営をとっています。

ここは、他に付き合うところがないので、さびしいので、学生の課外活動への参加率は高いです。先生の評価はどうか分かりませんが、少なくとも学生同士の人間関係については、わりと学生たち自身の点数が高いです。それが、この大学の売りだと思います。教育大学との関係もそういうクラブ活動の関係でいいますと、けっこう一緒にやっているんです。

最近元気なのは、演劇部です。演劇部もいっしょにやっています。うちの大学の女子アイスホッケーが全国制覇したことがあります。そのときは全国からたった4チームしか来なかった。でも、連戦連勝でした。その連戦連勝した釧路公立大学のチームの半分は釧路教育大学の学生だった。向こうにもチームができてやったら、うちは勝てなかった。連戦連勝で全国制覇したときは、私がメダルをつくって渡しました。学長表彰をやりました。いろいろと協力はしております。ここを卒業して釧路教育大学の教育大学釧路校の大学院に行っている人も一定数おります。むこうに行ってからの評判も、そう悪くはないと思っています。

将来構想

荒又　将来構想についてですが、ここでは何も言わないことにします。私個人で考えている事は、おりに触れてたくさん話しました。

公式なものには一切何もなっていません。公式には、釧路市はあまりにもいま貧乏ですから、新投資する金がないのです。私が、新しく就任したばかりの綿貫市長に言いましたら、もっと金のかからない何かないのかというわけです。

私が学長になる直前に、経営学科ができて9億円ほどの投資があって、進んだのです。私が赴任したとき以来、そういう大きな金がかかるプランは回ってこないです。私の代になってあったことは、コンピューターが入れ替わったことや地域経済研究センターを内装を変えて整備したことなどです。そこらにあるサークルのクラブハウスを一棟増やしたことや、あまり使わないでいた地面をパークゴルフ場にしたことや、端の方へバーベキューハウスをつくったことなど、実に質素な話です。

このあとで若干投資の余地がでてくるかと思っていますが、この大学は、質素なんですがしかし赤字を出さないでやってきていますので、若干のたくわえを、事務組合という別組織になっているから蓄えられるのです。これが、完全に市立大学であったら、一般行政費で残したら、全部どこかに食われてしまう。

なにせ、金くれ金くれと言う金食い虫ばかりがいるのです。市に頼んで何かしてもらおうという精神の者ばかりです。自分で金を払って何かやろうという人はいないわけではないが、稀有です。三大産業が払ってくれる税金を、市役所を媒介として、一銭でも自分のところに持ってこようとする思想の人しかいないのです。といったら言いすぎですけれど、大体表面に出てくるものは、そういうものばかりです。

そうではない、まったくそうではない人たちもいるのです。私は知っています。固有名詞で知っています。そういう人たちは、商工会議所や市に寄りつかないです。みんな自前でやっています。ホーマックは釧路の出発ですから。赴任したとたんに、ホーマックだけなんであんなに元気なのだろうか。私の知らないいいことを、教えてくれたらつき合うかもしれない。私が何を気にして何を質問したのか、分からない人が多いのです。そういうどうでもいい人には時間がもったいないから、つきあわないと大きな声で言うんです。敵もたくさんつくりましたが、

味方もつくりました。そういう人たちは、概して言うと、いわゆる政治や商工会議所の表面には出てこない別のタイプの人たちなのです。そしてその中間くらいに、ビジネスを背負って必死になってやろうとする人がいるのです。

釧路太平洋炭砿がつぶれたあと、「釧路コールマイン」になりました。あれだって本当は炭鉱業に使ってはいけない金を運転資金に使ってしまっているのです。だけどコールマインには、わずかですが地元のビジネスマンの中心部分が自腹を切って投資しているのです。1000 万とか 500 万とか。これ投資です。会社が潰れたらパーです。1000 万や 2000 万で動く会社ではないですよ。もっと大きなお金が動かなくてはいけないのですけど、少なくともちゃんと自分のお金をかけて、地域のためにがんばっている人もいるのです。私はそういう人たちを一生懸命サポートしようと思っているのです。

学内の意思疎通

上田理　大学の事務をしていまして一番思うのは、先生のおっしゃった学長のリーダーシップや市長さんの考えといったものを、上の方が下に伝えるというのはすごく難しいような気がするんです。事務方、あるいは教員に伝える、それがないと一体として動き出さない。あと、学生にも伝えていくというお話でしたが、その部分についてどのようにされているのか、機会の持ち方を含めてお聞かせください。

荒又　先代の学長は、北大の農経の出身で図書館長も務めた高嶋正彦さんという方だったんですが、高嶋先生は財政学の講義もされていたんです。それで、私が赴任したとき、どうするのかと皆さんに聞かれました。私は、やりません、と言いました。

この大学も 8 年も経っていれば、教務上のことは安定して動くようになっているはずですから。そして、私が考える学長としての仕事をしようとすれば、時間割で縛られたら困りますので。私、学部長をやったとき、講義がメチャメチャに荒れて、ひどいいやな記憶があるんですよ。だから、やりません、と。そのとき半分ジョークで、学長に不可をつけられたら、学生が可哀想だと（笑）。

ですから、講義を通じて伝えることはできないですけれど、私は、卒業式、入学式の告辞などは相当力を入れてつくります。A4 版 2 枚程度ですよ。蓮見さんみたいに、あんなことしゃべりませんから（笑）。

それから、昼食は原則として学食で食べるんです。

そうしたら、いつの間にかランチ友だちができるんです（笑）。

上田理　学生ですか。

荒又　はい。私が座っていると、あっ学長、と言って、ちゃんと前に座って食べてくれるんです（笑）。あまり同じ学生とランチ友だちになると、他の学生が妬くものですから、いろいろと気をつけますけれどね（笑）。そういうときに、いろいろあります。

私 7 時半に来ますけど、8 時に掃除のお母さん方が来る。8 時半に職員が来ます。そのあたりから、私、条件があるときには玄関先にいるんですよ。そして、登校してくる学生に、「おう、おはよう」。「こっち向け」とか、「君はどこから来たか」とかね（笑）。そうやって、なるだけ顔見知りをつくります。そういうチャンネルをいろいろつくる。

それから、この頃少し途切れているんですけれど、私が企画する「おにぎり懇談会」というのをやったことがあります。それは私がしゃべるというより、私が司会をしながら、地域のおもしろい人を――この間、おでん屋で隣でおもしろかったからちょっと来てくれ、とか（笑）――実にランダムに連れてきては、ここでその人たちにおしゃべりしてもらう。

ただ、昼休みですから、学生たちには単位のでないプログラムです。連れてきた人にも一文も払いません。その人たちもサービスです。だから、私が、来た人たち全部に、おにぎりを食べさせる。おにぎりをタダで配るわけです。「これを、“三方一両損の世界”と言うんだ」などと言ってね（笑）。これ、16～7 回やったと思いますけれど、けっこう成功したと思います。私がキャッチコピーをつくって、チラシにして食堂で配るんです。

姉崎　先生が。

荒又　そうです。世に学長はいろいろあっても、学生

にビラを配っている学長は私だけだけです（笑）。学生運動上がりの学長ですから、これはお手のものです（笑）。こういうことをやって、いろいろとチャンネルはつくるんですけれど、まだ、なかなか制度化されたものはないです。

でも、私は任期が最期になったら、最終講義を教授としてやろうと思っています。私は急に北大から停年 2 年前に移ってきたものですから、最終講義をやらないで来たんです。この大学でも、教授の最終講義のモデルが確立していないです。私は僭越ながら、少なくとも一つのモデルとなるような最終講義をここで残していきたいと思って
ているんです。これはちょっと先の話です。

学生とは始終そこらで話しています。学生から、“フレンドリーな学長”と言われています（笑）。

姉崎　ボトムアップとトップダウンの関係は今、大学の中で問われている問題ですね。教員・職員との関係でもそうですし、学生との関係でも。

荒又　職員との関係は道場破りみたいなものです。私が最初に赴任したとき、貧乏なもので先生方にコンピューターが配られていない時期があったんです。今は LAN ができて、配られていますけど、私が赴任してからなんです。そのとき、学長にいるかと言われたんですが、いらないと言いました。みんなが貧乏して、自分の研究費 50 万円から買わなければならないときに、学長だからといってもらったら申し訳ないから、いらない、と。そして、私はいつも事務室に行って、座って、メールを打ったんです（笑）。

メールの番地をもらうのだって戦いだったんですよ。私が番地をくれと言ったら、まだ LAN をどうつくるか決めていないからダメです、と。そんな返事でした。だから、私、事務局長に手紙を入れて、「外国の学長たちと連絡しあうときに、いちいち北大に戻って、北大の名誉教授として北大からメールを発信しなきゃいかんのか、そんな恥ずかしいことできるか」と言ったら、「今度の学長がこんなこと言っているがどうしよう」ということになり、私に初めて番地をくれたんです。他の大学でメール環境のあるところから来た人たちもいたんですが、電話回線使えとか、電話回線が満杯だから太い線を使えとか、私が赴任してからそうなったんですよ。

そのメールを使って、教員には、この頃は相当発信しています。分かってもらわなければならないことや、私はこう思うということをあけすけに。

この頃は、大学の動きが厳しくなってきましたでしょう。私は、「ここは国立大学ではないから、しばらくは動きはないから、皆さん、鬼の居ぬ間に洗濯していってください」と。ここは 40 人しか教員がいないんですが、私が赴任してから 6 年間に、いろんな大学から来て、ドクターコースを終わったけれど博士号をもっていなかった人で、ここへ赴任してから博士号をとった人が 6 人出ました。

それから、退職に伴う入れ替え人事はインターネットで全部オープンです。そうしたら 5 人の課程博士が来ました。私が赴任したときには、経済学博士は私 1 人だったんです。そういう大学ですから、アカデミック・コアを私の時代につくっている。

それから、幸か不幸か、教授会は一つしかありませんから、私が議長をやってがんばれば何とかなっていますが、本学しか経験のない若い教員が増えたときに、教授会というのはどうあらねばならないのかという教授会の行動についてのある水準が達成されない中で、今議論されていることが起こったら、もう完全な先祖帰りですから、私は、教授会はどう行動しなければならないかということについて、学内で必死にメールを流しています。

上田理　先生のメールというのは、「風の荒又三郎」という…。

荒又　それは地域の方です。

上田理　学内には流さないのですね（笑）。

荒又　もちろんです（笑）。

平島　“KUSHIRO DAISUKI”といったような HP の文芸コーナーで先生の文章を拝見しました。

荒又　そうですか。誰かが転載したのかな。私が「風の荒又三郎」で発信したものを、羅臼の魚屋さんが、自分の HP に載せていいかと言うから、いいですよ、ということがありました。それから、私がやったものの中で一番良かったのは、石川啄木の釧路に来たときの歌を英訳したものがあって、港文館に行くと 100 円で置いてあります（笑）。

上田理　専門は経営でいらっしゃいますよね（笑）。

荒又　だから、非公式の名前でやっています（笑）。公式の名前でやって間違えがあると困りますから（笑）。

理念・目的と地域性

上田理　非常勤の教員の人数は。

荒又　専任と同じくらいです。

上田理　釧路の方々が多いですか。

荒又　そうです。でも、集中講義で呼ぶ方は札幌とは限りません。全国からです。

計算で出てしまうので隠してもはじまらないことですから、この大学の弱点を言ってしまうと、単位を出す時間の標準がギリギリなんです。北大なんかでは、30コマあって、出張なんかで少し落としても、試験以外にゆうゆう27～8コマとれたんです。でもここは、ちゃんととれていないケースがあるんです。これは、経済・経営のアカデミック・コアを確立しようというプログラムが動き出したときには何とかしないといけないですね。

今、本学は試験期間ですが、それが終わると集中講義期間になります。9月のはじめにもあります。通常講義がはじまるのは遅いんですが。

上田理　3セメスター制に近いような感じですが。

荒又　3セメスターにして、もう一つ置けば、学生には便利でしょうけど、先生たちには厳しいですね。

上田理　釧路にある経済学部ということで、釧路ということに特質をもたせた科目があるのかどうか、それで、非常勤の方で現場の方がいらっしゃっているのかな、と思って質問したのですが。

荒又　皆さん、そうお思いになるでしょう。私も赴任したときからそう思っているのですが、まだうまくセットできていません。

特に「地域と産業」なんていう科目は、ここの先生が頭と尻尾をマネージメントして、試験の出題・採点は全部専任がやって、あとはゲストスピーカーを入れて、のびのびと話してもらえばよいので、私が人材選びもやってあげるよ、と言っているんですが、それはそれで、それなりの緊張を要する仕事なので、まだ動き始めていません。

それから、「地域社会学」とか、釧路の地域に特化した講義も少しありますけれど、この資源限界の中で特色を出そうと思えば、地域の中で喜んで協力してくれる方はたくさんいますから、そういう方たちの講義をはめて。総合講義はダメなんです、てんでばらばらで。誰か2人くらいの先生が責任をもって、自分もその講義に全部出て、ゲストスピーカーを迎えて、司会をして、まとめてやれば、協力してくれる人材はたくさんいるんです。

姉崎　ある種の地域総合学。

荒又　総合学というよりは、もっと焦点を絞って。

姉崎　経済・経営に特化した大学で、パースペクティブの広がりを求めながら、一方で焦点化していくことと、学生たちには教養教育のある程度の広がりをつけながら専門教育も行っていく場合の問題はどうでしょうか。

荒又　まだ問題はらみです。この大学は、開学したときは、専門の教員がリクルートできないものだから、割合に教養担当の、周辺科目の人たちが多かったんです。そして、今は経済・経営の2学科で、教員も3人くらいしか増えていない状態で、やや専門科目にウエイトがかかり過ぎているきらいはあります。

私は、大学と言うからには、大きな大学のようにいろいろな専門を揃えることはできないけれど、いくつかの分野について、これこそリベラル・アーツであるという風格のある先生を配置して、一緒に住んでもらわないと大学にならないと思っているんです。強く強く思っています。

しかし、そのバランスをどうとるかということは、実は難しい問題です。教授会の民主的討論で決まることがらではありません。どうとでもなります、議論としては。そして、一番悪い印象をもっているのは、北大の教養部の教官会議です。みんな我が田に水を引くんです。新人事というと、自分の領域や知り合いの先生を多くしたいんです。そういう中で、全体のバランスなんていうことは、論理の世界ではないです。だから、そのバランスは学長に預けてくれというふうにしないと、性格を出せないです。

姉崎　昨年私たちが訪れた小樽商大でも、かつては社会科学の総合化をめざしていたのが、文科省や北大経済との関係、学内の議論などいろいろあって、商科に焦点化した形でまとまりをつくっています。

荒又　昨年・一昨年の2年間、あそこの運営諮問会議のメンバーだったんです。いろんな先生がいて、いろんなことをやりたいですから、なかなか一本化していかないですね。

姉崎　釧路公立大の場合は、統合は経済をベースにしてということになりますか。

荒又　それが出発点です。そして、経営プロパーのところで育ってきた若い先生方が力をつけはじめていますから、その点で不安はないです。

ただ、手持ちの資源が少ないですから。昨日、会議で一緒だった立命館とか法政みたいなところは、何かやろうとすれば大きな力が出ますが、私たちのところは箱庭みたいな世界ですから。でも、だから見えることもあるんですよ。

学生の可能性を引き出す

松浦　こういう地域的に透明感があるところで、先生が学生を育てていらっしゃる姿が非常に見えやすいです。そこで、関心がありますのが、学生のたくま

しさを育てていく教育をどのようにされているか、ということです。先生のオーラといいますか、そういうところからたくましさを感じたんです。

荒又　それは、そう願っています。

松浦　はい。そして、学生が多様な選択肢の中から選び取って伸びていくチャンスを与えるというお話でしたが、そのとき、伸びていく学生は何か資質をもっているのか、それとも、先生方の刺激でそういうものを花開かせていくことが可能なのか、その辺をどのように考えておられるかお聞きしたいと思います。

荒又　私、67歳から68歳に近づいていますが、人間を見るのは本当に難しいです。いつも失敗ばかりして反省しています。

でも、いくつかのケースで言いますと、1年生に入ったばかりで、そこらで群がって、学長主催のビールパーティーをしよう、なんて言って、そこらで勝手に火を起こして、バーベキューを始めたりしてね、最初はつきあっていたら、そのうちこの辺の屋上にはい上がり職員に注意されたりね。そういうしょうがない連中がいて。それから、大学祭の前夜祭で悪ふざけしたりね。でも、そういう連中の中から、元気を出して人より早くちゃんと就職していくのがいたりして、やっぱりあのとき芽をつぶさないで、つきあってやっててよかったと思うことがありますよ。

それから、野球か何かのクラブの学生で若い先生とつきあっていて、その先生の研究室へ行くと、いつ行っても勉強している。先生というのはこんなにも勉強するものなのかということが分かって、その学生も北大の経済の大学院とか、他の大学へ行って、けっこうしっかりやっていると聞いています。その先生が、「いやあ、荒又先生には悪いけど、よその大学院へやりました」とか言ってね。そういうケースもあります。

学生がどこかで自信を取り戻せるようなチャンスを大学が用意できればいいんだと思っています。私は英語のできない先生ということになっていたんです。でも今回、啄木の詩を翻訳して、カナダの人が見ても理解できる英語になっているわけです（笑）。そうすると、長くつきあっている人は驚くわけです。そもそも人は、60になっても、その気になれば開花する潜在力というものをもっているんです。

私は昭和9年生まれですから、新制中学の一期生です。当時の英語教育はひどいものでした。教えられる先生がいないですから。立派な旧制時代の本は私のところにありましたけれども、舌の形とか、口の形を真似しても音にならないですよ。そういう中でやってきました。しかも、私は、どうしてこんなに人前でしゃべる職業についたか不思議なくらい、もともと幼稚園で、人前で歌を歌えと言われたら泣いて帰ったような人間だったんです。本は読みましたけど、人とコミュニケートしようという気がさらさらないわけです。しかも大学の先生になっても、共稼ぎで子どもが3人もいますから、長期に留学するなんてことはできないわけです。ですから、私のその面の能力は開花しないできたわけです。

ところが、その気になれば、この人たちとコミュニケートしなければとか、何かを受け止めなければとか思ったら急にはじまるんです、人間というものは。ですから、人間の可能性がどこに隠れているかなんて分からないですよ。みんな自信喪失の状態で、偏差値でやられていますでしょ。だからどこかで元気をつけて、何かやってみようかという気を起こさせれば、8割くらい成功したようなものです。何かやって、人間は伸びていくのだと思います。この大学でも、そうやって延びていったケースがあるわけです。

姉崎　JABEEのことなどは。佐藤君は工学部の出身なんです。

荒又　そうですか。私もどういうことになっているか調べようと思っていて、経済学部にも導入の動きがありますから。

今度、韓国に留学することになった学生も、出身は決して進学校ではないですが、うちの大学に入って、何か目標が見えればぐんぐん伸びるんですよ。そういうふうに、先が見えればね。野球ばっかりやっていた学生が、先生の勉強ぶりを見て、そして、少し先が見えるわけです。

地域が大学をつくってくれたことのプラスとマイナスの面のうち、制限の方は、大学をつくった人たちは何かが足りないから大学をつくったわけです。だけど何が足りないか分かっているわけではないんです。そして、何かやろうとすると、どうしてとか、何でそんな金のかかることをとか言うわけです。だから、予算をもらう前に、何でも私がやって見せなければならない。やって見せて、しばらくすると、ああ、そんなものか、となるんです。

この大学は地域から生まれて、まだ15年目ですから、大学としてまだ育ちきっていないわけです。ですから、大学のコアはどういうものでなければなら

ないかが、まだ確立していないんです。世間にも見えていない。そこを確立して、守らなければ、この大学をつくった意味は分からないままに終わるんです。

ですから、私、いろいろな議論をしますけれども、立派な大学は歴史があって今がありますから、そういうところから見れば、何だということかも知れないけれど、できたばかりの大学で、私が赴任してからの 6 年間で 6 人が博士をとってくれましたとか、スタッフの中での社会的な評価の条件ができてきましたとか。それから、経営学科をつくるときに、けっこう書類をつくったり準備をしなければならないんですが、私が赴任したばかりのときは、ここの紀要が、経済系・社会科学系のと、人文・自然科学系のと地域のと 3 本あるんですが、論文が出なくて、一時期は立てられないくらいの薄さになったんです。私が、鬼の居ぬ間に洗濯だとか言いながら勉強してもらったら、博士が増えてきて、論文を応募する人が増えてきました。もっと大きな大学から言えば、この頃は紀要なんて評価してもらえないよとか、レフェリーのついた論文誌でなければダメだとか、それはそれで一つの水準です。でも、ここの場合は、ディスカッションペーパーで30人くらいにしか配らないものでもやる、そして紀要に書く。そしてそれを元にしてもっと大きいところで勝負するとか、そういうことをちゃんとやらなければ、飛んでなんかいけないですから。“何段跳び”なんてことはこの世界では不可能ですから。そうやって、私はできたばかりの大学を励ましているわけです。

この頃は研究費も若干は傾斜して、全国学会のプログラムに報告者として名前が載ったらプラス・アルファの旅費をあげるとかね（笑）。

姉崎　そういう制度があるんですか。

荒又　ええ、つくりました。そうやって励ますんです。これは地域社会ではすぐに理解されないですよ。

松浦　そういう先生方の活気が学生に身近に伝わることが、大学の活性化に非常に重要な意味をもつということですね。

荒又　教育は人間と人間の生のぶつかり合いがないとダメです。いくら e ラーニングと言っても、ときどきは会っているから、それができるわけです。

私も北方圏志向で、カムチャツカとかに行って動いています。カムチャツカの教育大学に行って副学長に会ってコネクションをつくったのは私です。そういうふうに、元気のいい先生とか元気のいい学生がいれば動くわけです。

私がカムチャツカから帰ってきたら、1 人学生がトコトコと学長室にやってきて、私カムチャツカに行きたい、といきなり言うんです。そうか、じゃ、この間会ってきた人に連絡して相談してみるか、ということになりました。そういうとき、向こうは合理的ですよ。うちの大学に日本語のコースがあるので、日本人の学生が一緒に勉強してくれたらとてもメリットがあります、ということで、授業料とらないからどうぞ来てくださいということになりました。ただし、ホームステイの費用は払ってください、ホームステイ先はよい学生がいるので紹介するから、ということで、同級生の家にステイして、息子さんや娘さんもいるわけですれど、一緒に学校に行きました。私は、あんまり気の毒だから、広瀬さんという日本語の先生が停年後、講義に行っていましたから、広瀬先生の手伝いくらいはタダでさせてもいいから、と言って、バランスをとりました。そうしたら、向こうはちゃんと時間をとって、学生には 140 時間のプログラムでロシア語を教えてくれました。そして、成績は「優」でしたという証明書をくれるわけです。ここの大学では教授会で準備がないから、彼女の卒業の単位にはなりませんでした。だけどちゃんと行ってきました。彼女はカムチャツカ戦後のはじめての日本人の留学生ですよ。

そういうことで、はじめればスッと行くんですが、なかなか行かない。北方圏はいろいろとつなごうとしているんですが。

韓国の牧園大学では、関心のある人が動いた。そして学長がサポートしたら、ちゃんと協定大学になって、行き来も多くなっています。教員もそうですし、スチューデント・イクスチェンジも拡大しようとしています。1 人でも 2 人でも、おもしろい、一緒にやるという人がいれば動くんです。学長だけではね…せいぜい「おにぎり懇談会」で終わるんです（笑）。

住民の文化・学習活動

平島　くしろ市民大学についてお聞かせください。

荒又　教育委員会の企画ですから、基本的なことはそちらでお聞きください。

ただ、私が赴任したらいきなり、釧路公立大学の学長は当て職でくしろ市民大学の学長です、ということで、開校式のときに挨拶して、終わりのときに成績書を渡すといった儀礼的なことをしました。

だから、運営委員会に出て、私、いろいろと発言

してきたんです。私が赴任したときのプログラムでは、釧路では市の教育委員会が中心になって、釧路新書・釧路叢書など地域の歴史や文化に関する研究は蓄積があるんですが、それを紹介しながら、その一部が必修科目、後は選択科目で、釧路公立大学、教育大学、短大、高専といくつかの高等教育機関があるわけですが、そこから任意に一つ二つ、先生を派遣してもらって、その先生の得意の科目をしゃべってもらう、それでセットになっていたんです。

私はそこで、「高等教育機関の先生をしゃべらせるから市民大学だ、なんていうのではダメだ。もう少し地域の知恵を活用する方法がある」と言いました。

市民大学なんかをやりますと、何回も何回もまじめに人の話を聞く高齢者と、人の話なんか聞かずに自分が何時間でもしゃべる高齢者とがいますが、その二つを何とかしないといけない。しゃべらない人にはしゃべらせて、しゃべる人は口封じして（笑）。それで、私が企画して、「激論バトル、釧路は良い所か悪い所か」というのをやったことがあるんです。私が司会者です。それは必ずしも成功しなかった。良い所か悪い所かなんていうのは、立論を変えれば同じことでもあるわけですが、すすんで「悪い所」の席に座る人なんていないですよ。それで、私が「悪い所」に肩入れしてやると、私の主催するゼミみたいにはなったけれど、十分な討論にはならないですね。最近やったのは、釧路の古い写真集ができました。写真というよりも絵ですね、スケッチのようなすごく細かい。そういうのをもってきて、昔の地図を復元する作業なんかをお年寄りがはじめたんです。そうしたら、みんなでよってたかって工作して、展示したりできました。

それから、釧路にはけっこうおもしろい人がいっぱいいます。文化的蓄積があるんです。中にはお医者さんを途中で放り出して、宇宙飛行士になりたくて、受験して訓練のあるところまで行ったけど、最終選考には漏れたとかね。そういう人に次々にしゃべらせる。自分たちの仲間からしゃべらせてみんなで批評したり、そういう多彩なプログラムが去年・一昨年あたりから動き始めています。それをご覧になると、私の言っている意味が伝わるかなと思います。

釧路の悪いところは、仲間内で勉強したことを、ここぞというときに発信することにならない。歌のサークルとか何とかのサークルとか、そこにはリーダーがいてけっこう厚みがあるんです。そこで、私、赴任したばかりのときに、ここは季節感が他とは違うので、釧路の歳時記、季節感を並べて、それでやったらどうだ、というのを言ったことがあるんです。それで子どもの作文集のようなものをつくったことがあるんです。

例えば、釧路は雪道ではないです。もう氷道です。昼間解けた雪が夕方たちまち凍ってしまって、町中スケート場みたいになります。だから「凍路氷道」なんていう俳句がたくさんてあります。“凍り道両手広げて宇宙あり”なんてね。これはすばらしい。そういう句を集めて釧路名句100選なんていうのをつくれないかと思ったりします。

釧路の文化の特徴は、原田康子の「挽歌」のような世界です。おそらく、フランソアズ=サガンの「悲しみよこんにちは」なんていうのはその系統ではないかと思うんです。読んではいないので勘ですが。釧路にはものすごい金持ちがいたんです。金持ちとヤン衆の世界だったんです。中間層がいないわけです。札幌はしがない中間層ばっかりの世界です。役人の街ですから。だから、原田康子は夫と札幌に移ったとき、何てチンケな場所だ、と思ったんだそうです。釧路の往年の豊かさが没落して残照になりかけたときに、あの「挽歌」はできたんです。だから、そういう流れの何かはあるんです。

だけど、ヤン衆が落ち目になってきて金を落とさなくなったとき、盛り場も新しい消費者たちに対応できなかったんですね。だから、釧路のお客さんがみんな帯広に買い物に行ったり、札幌に買い物に行ったりするわけです。ここの街には、消費者をちゃんと見てちゃんと売るビジネスが育たないわけです。なぜかと言うと、みんなヤン衆を相手にしてきたからです。

私は声をプレパラートに入れて残したいようなことをいっぱい聞きました。「昔は良かった、漁師さんが、何仕入れても全部買っていってくれた」、これですよ。選ぶなんてもんじゃない。あるものを買っていく。だから客の需要に合わせて、仕入れるものを次々に変えて、そして生活を高めていくような文化がないんです。

姉崎　そういう旦那衆みたいな方が。

荒又　旦那衆がしっかり根を下ろして、釧路の文化を育ててくれればよかった。ところが旦那衆はここは出稼ぎだと思っているから、何かつくるときに釧路に残さない。神様まで出稼ぎなんです。釧路太平洋炭砿がつぶれたら、炭鉱を守っていた神様の御神体

を飛行機に載せて元の神社にお返ししたんです。秋田県では、農民のリーダーが神様に祀られたそうですが。

ですから、これから本当にそれが根づくかどうかです。浪花町16番倉庫というのがあります。これも、函館の金森倉庫群ほど立派ではないけれど、釧路にもそういうものがあったわけです。その一つを借りて、その中で小さな文化事業をやろうというのが「浪花町 16 番倉庫を大事にする会」なんです。これは、そんなに大金持ちでない人がリーダーになって、年に 1 万円払うとオーナーになる。私もオーナーの 1 人です。200 人オーナーがいれば、1 年間文化活動をやって、多少は支えられる。そういう庶民のレベルの文化運動が、このごろやっと少しずつ出てきました。

そういうところで、私は、大学を守るためにがんばらなければならないわけです。

姉崎　教育大釧路校もそうですが、公立大も外から来る学生が多いですね。そして、大半は出身地に帰るにしても、一定部分は地元に残る。そういう人たちが新しいものをつくることもあるんじゃないでしょうか。

荒又　それがなかなか難しくてね。でも、そうなるといいですね。

姉崎　どうもありがとうございました。